『わざわいだ』と嘆かれる者たち　イザヤ書 10 章 1-12

2023.1.29　礼拝

序論）

先週は、憐れみ深い神様が、イスラエルの罪のゆえにイスラエルを裁いてもなお、その御怒りがおさまらなかったことを見ました。

【主】をそこまで怒らせたイスラエルの罪は、神様の裁きがあってもやり直すことができるといって、【主】を軽んじたことであり、実際に裁きをうけてもなお悔い改めないことであり、そして、互いにいたわり合わないことでした。

いつまでたっても神様との関係を回復しようとしないから、人と人との関係も壊れて、お互いにいたわり合えなくなっているそのイスラエルをみて、神様は怒りを燃やしつづけられたのです。

今日の 10 章の 1 節から 4 節は、その神様を怒らせ続けるイスラエルの罪を、引き続き指摘している箇所となっています。イスラエルは何をして、【主】の御怒りを受け続ける状態になっているのでしょうか。

弱者を食い物にする権力者）

【主】の怒りが燃やされている相手、それはイスラエルの権力者たちに対してです。1 節を読みましょう。

10:1 わざわいだ。不義の掟を制定する者、不当な判決を書いている者たち。

「掟を制定する者」というのは、立法の権利をもっている人たち。**ここでいう立法とは、神様がモーセに与えた律法のことではなくって、法を立てると書くこの「立法」のことです。日本で言えば国会です。**

神様は、モーセを通して様々な律法をお与えになりましたけども、それはいわば日本でいうならば憲法のようなもので、さらにもっと細かい生活に基づいた法律を制定する人たちがいました。

その人たちは本来、神の民が神の民としてふさわしく生きるための法律をつくらなければいけないのに、弱いものから富を巻き上げ、富んでいる者がより富むようにするための法律を作っていました。

さらに「**不当な判決を書いている者たち**」とありますが、これは裁判官たちです。定められた法律にしたがって、公平な判断をくださなければいけないのが裁判官ですが、当時のイスラエルの裁判官は、公平な裁判を下すのではなくって、賄賂をもらって自分たちが儲けるための判決をくだしていたのです。

憐れみ深い神様は、権力者がその権力をつかって弱いものを食い物にするような行為を徹底的に嫌われます。でも、2 節にあるように当時のイスラエルの権力者たちは、その【主】が忌み嫌われる行為を平気でしていたのです。
だから、【主】はかれらを裁いてもなお、怒りを燃やし続けられたのです。【主】は彼らに対してなんといわれているでしょうか。3 節と 4 節を読みましょう。

10:3 訪れの日、遠くから嵐が来るときに、あなたがたはどうするのか。だれに助けを求めて逃げ、どこに自分の栄光を残すのか。
10:4 ただ、捕らわれ人の足もとに膝をつき、殺された者たちのそばに倒れるだけだ。それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

当時の権力者たちは、弱いものを虐げ、その人達から奪い取った富を喜んでいたのです。でも、【主】がさばきの御業をなされるとき、思い上がった彼らは何もすることができず、誰にも助けてもらうことが出来ず、その富はただ奪い去られるだけなのです。**3 節にある「栄光」とは、**「富」と訳すことができる言葉が使われていて、神様は、不当な律法と判決を行っている権力者たちに対して、「お前たちが弱いものをいじめて巻き上げた富は、どこに残るのか。結局奪いされるだけだ」と言っています。
憐れみ深い神様は、弱い人を助けることを望まれています。それをしないで、自分たちのことばかりを考えて、隣人を蹴落とすような生き方をするのならば、【主】はそのような者たちに対して、裁いてもなお収まらない怒りを燃やされるのです。
神様は、そのような人たちのことを「わざわいだ」と嘆かれています。

さて、ここまでが神様を怒らせ続けるイスラエルの罪に対する預言です。
次の 5 節からは、そのイスラエルを裁くために用いられたアッシリアに対する預言です。

アッシリアが勝利したわけ）
もう既に何度もいっていますけども、アッシリア帝国は非常に力が強くて、次々と周辺諸国を攻め滅ぼしていきました。その破壊の力は来たイスラエル王国にまで及んだのです。では、なぜアッシリアはそこまで強い国になることができたのでしょうか。神様は、アッシリアに対して 5,6 節のように言われています。

10:5 「ああ、アッシリア、わたしの怒りのむち。わたしの憤りの杖は彼らの手にあ

る。
10:6 わたしは、これを神を敬わない国に送り、わたしが激しく怒る民を襲えと、これに命じる。物を分捕らせ、獲物を奪わせ、道端の泥のように、これを踏みにじらせる。

アッシリアがどうして、神の民の国、北イスラエル王国を滅ぼすことができたのかというと、神様が、神様を敬わないイスラエルを罰するために、「神の怒りのむち」「神の憤りの杖」として用いたからです。
神様の視点でいうのならば、アッシリアが優れていたからイスラエルに勝利することができていたのではなくって、神様がアッシリアを神の裁きの道具として用いたから、北イスラエル王国を滅ぼすまでに大きくなることができたのです。
これがある意味では、アッシリアの繁栄の本当の理由なのです。神様がアッシリアを道具としてつかったからアッシリアは大きくなることができたのです。

【主】の支配に気づかないアッシリア）
でも、とうのアッシリアはそのように自分たちを道具として使っているお方、自分たちを支配しているお方がいるなんて気づいていないのです。なぜならば、彼らの心はおごり高ぶっていたからです。7 節を読んでみましょう。

10:7 しかし、彼自身はそうとは思わず、彼の心もそうは考えない。彼の心にあるのは滅ぼすこと、少なからぬ国々を絶ち滅ぼすことだ。

アッシリアという国は非常に残虐な国だったようです。当時の遺跡から出てくる歴史資料によると、彼らが引き連れる奴隷の多くは、その体の一部がなくなっており、彼らは占領した国の人々を奴隷として扱って、耳を引きちぎったり、鼻をもぎとったりするなど、そのような残酷なことをして、人々を恐怖によって従わせていました。まさに【主】が言われている通りに、彼らの心の中にはいかに自分たち以外の人々を滅ぼすか。で占められていたのです。
まさに、「自分には周りを滅ぼす力がある、権力がある。」という思い上がりが、アッシリアの人の心を満たしていました。だから、彼らは 8-11 節のように心でつぶやいていました。

10:8 というのは、彼がこう思っているからだ。『私の高官たちはみな王ではないか。
10:9 カルノもカルケミシュのよう、ハマテもアルパデのようではないか。サマリア

もダマスコのようではないか。
10:10 エルサレム、サマリアにまさる刻んだ像を持つ、偽りの神々の王国を私が手に入れたように、
10:11 私はサマリアとその偽りの神々にしたように、エルサレムとその多くの偶像にも同じようにしないだろうか』と。」

ここにでてくるカルノ、カルケミシュ、ハマテ、アルパデ、サマリア、ダマスコというのは、アッシリアがことごとく滅ぼした国々のことです。サマリアというのは北イスラエル王国の首都のことですし、ダマスコというのはアラム王国の首都のようです。アッシリアはここで言われる国々をことごとく制圧して、滅ぼして、そこにある偽りの神々も、支配してきたので、「エルサレム」つまり、南ユダ王国もアッシリアがその力によって制圧し、そこで祀られている神も自分たちが支配するのだ。そういっているわけです。

アッシリアは、まことの神様のことを知りませんから、「エルサレムとその多くの偶像にも同じようにしないだろうか」といっています。しかし、南ユダ王国には確かに偶像もありましたが、エルサレムを支配しているのはまことの神様、アッシリアをもただの道具として使うことができる。世界のすべてを支配されている【主】なる神様だったのです。

その神様に対して偶像と同じ扱いをし、自分たちが他の国と同じように支配することができるのだ。というのは、まことの神様を恐れない高慢以外のなにものでもありません。

神様は、まことの神様のご支配というものを悟らずに、自分は強いのだ、何でもできるのだ。と思い上がることをいう者を、「わざわいだ」と言われます。**5節からはじまるアッシリアについての預言**は、「ああ、アッシリア」という神様の嘆きの言葉からはじまっていますが、実はこの「ああ」ということばは、イスラエルに対して「わざわいだ」といわれたことばと、同じヘブル語がもとの聖書では使われています。

自分たちの成功にうぬぼれて、この世界のすべてをご支配されている【主】に思いを巡らさず、自分たちは何でもできると。思い上がる者を、【主】は「わざわいだ」と言われるのです。

みなさん、今の時代では、「もう宗教なんていらないのではないか。」「神を恐れ敬うなんて、時代遅れなのではないか」という人が多くいます。それは、自分たちの人生は、自分たちの力だけでやれている。と思っているからです。

でも、それはアッシリアと同じように、この世界のすべてをご支配されている神様のご計画を知らないだけなのです。

みなさん、神様に道具として用いられて、成功しているから、自分は正しいなんて思い込んではいけないのです。時々、自分の思う通りに事が進めば、それは神様が許可したことだとか、自分は正しいのだ。と断言する人がいますけども、神様はすべてをご支配されるお方ですから、悪人であったとしても道具として使うことはされるのです。

大切なのは、このすべてをご支配される方の前に、私達はいつもへりくだって歩むということです。成功しているときも、失敗しているときも、高ぶることなく、いつも【主】の前にへりくだって歩む。それが【主】が望んでおられることなのです。

アッシリアはそれが出来ていませんでした。だから、【主】に道具として用いられつつも、「わざわいだ」と嘆かれて、結局さばかれることになるのです。12 節を読みましょう。

10:12 主はシオンの山、エルサレムで、ご自分のすべてのわざを成し遂げるとき、アッシリアの王の思い上がった心の果実、その高ぶる目の輝きを罰せられる。

結局、アッシリアは南ユダ王国を滅ぼすことはできません。普通に考えれば、南ユダ王国というのは、北イスラエルよりももっと小さな国ですから、周辺諸国を攻め滅ぼしたアッシリアが、南ユダ王国を滅ぼせないわけがないのです。

でも、すべてをご支配される【主】が、アッシリアを「わざわいだ」といわれたから、彼らは南ユダ王国を滅ぼすことができず、やがて自分たちも滅んでいってしまいます。まさに【主】が「アッシリアの王の思い上がった心の果実、その高ぶる目の輝きを」罰せられたのです。

まとめ)

今日は、北イスラエル王国、そして、アッシリア帝国が神様に「わざわいだ」と嘆かれた箇所をみました。

【主】は、力を持つものが不当に弱いものをいじめて、自分たちだけが得するように生きることを「わざわいだ」と嘆き、消えない怒りを燃やされるお方です。

私達は、自分の力を、人々を助けるために使っているでしょうか。それとも、他者を蹴落として自分が得するために、自分の力をつかっているでしょうか。

競争すること、争うことが正しいことだとされている現代。自分の利益を求める

ことに集中することがいいのだと。この世の多くの声はいいますけども、【主】は、力を持つものが、弱いものを虐げて得をしようとする生き方を「わざわいだ」と嘆かれてさばかれます。

　また、アッシリアは、神様のさばきの道具として用いられていたにも関わらず、世界のすべてをご支配される【主】なる神様に気づかず、「自分は何でもできるのだ。すべてを滅ぼすことができるのだ。」と思い上がっていました。
　でも、そのように高ぶるアッシリアのことも、【主】は「わざわいだ」と嘆かれています。
　みなさん、みなさんはいつも、自分たちの背後には、すべてをご支配される【主】なる神様がおられることを覚えて、日々、へりくだって歩んでおられるでしょうか。
　うまくいっているから自分が正しく、うまくいかないから自分が間違っているというのではありません。万軍の【主】は、時に悪人をも用いて御業をなされます。
　【主】の【主】、王の王なる方を覚えて、いつもへりくだった歩みをしていきましょう。目先の成功を、自分の力や判断の正しさを見極める材料にしないようにしましょう。
　大切なのは、いつもへりくだって【主】のご計画を知ることです。【主】が今のあなたに持っておられるご計画はなんでしょうか。【主】の御業を悟らなかったアッシリアのようにならず、へりくだってみこころを求め、【主】のみこころを悟って歩むものとなっていきましょう。